

## 平成27年度 生活・自立支援キャンプ事業

# 子ども生き生き体験学習

- 1 趣 旨 児童養護施設との連携を深め、様々な体験活動をとおして、子供たちの豊かな情操を養い、自立を支援する。
- 2 期 日 平成27年8月18日(火)～19日(水) 1泊2日
- 3 対 象 者 児童養護施設「大隅学舎」に入所している子供
- 4 募集定員 無し
- 5 参 加 者 15人(小学生：2人 中学生：8人 高校生：3人 大隅学舎指導者：2人)
- 6 指 導 者 アウトドアショップ キャメル 江口 智昭 氏  
鹿屋市漁業協同組合職員  
国立大隅青少年自然の家職員

### 7 日程と主な活動

(1日目)	13:00	14:00	16:00	17:00	21:00	21:30
8月18日(火)		入 所 出会いのつどい オリエンテーション	《自然体験》 スノーケル体験	移 動 シャワー	《生活体験》 夕食作り 夕 食 入 浴	花 火  一日のまとめ 就 寝

(2日目)	6:00	6:30	7:30	8:00	10:00	10:30	12:30	13:20	13:40
8月19日(水)	起 床 準 備	朝 食 (弁当)	移 動 準 備	《職業体験》 施設見学 漁船乗船 給餌体験	移 動 準 備	《生活体験》 魚さばき体験 昼食づくり アンケート	昼 食	ふりかえり 別れのつどい 退 所	

### 8 事業運営について

- (1) 今回は、児童養護施設と連携して、施設で生活する子供たちを対象に体験活動を行うことにより、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立心の育成に貢献できるよう心がけた。
- (2) 小学5年生から高校3年生までの幅広い学年の参加となったが、漁業に関わる体験を行う中で、実際に包丁で魚を三枚に下ろすことに試みた。
- (3) スノーケルや漁船乗船、カンパチへの給餌体験など、未経験の活動を行う中で、子供たち自身が達成感や満足感を味わうことができるよう工夫した。

### 9 事業の実際

- (1) スノーケル体験の際には、マスクなどを初めて身に着けることに対して抵抗感を見せていたが、実際に海の中を観察で



きたことで興味や関心が高まり、積極的に活動していった。泳ぐ魚を見つけた子供たちは、友達と一緒に追いかけたり他の種類の魚を探したりして、スノーケリングを楽しんでいた。

(2) 夕食作りの際には、活動班内で協力及び分担して道具を揃えたり野菜を切ったりしていた。御飯や肉だけでなく、野菜までも残すことなく完食していた。また、片付けについても手際よく進めていくことができた。

(3) 2日目は、鹿屋市漁業協同組合に移動し、漁業に関する体験を行った。

ア 漁船に乗船し、鹿屋市の水産業を代表するカンパチの養殖場(いけす)を見学した。

イ 子供たちは初めて乗る漁船から、いけすのカンパチにえさをあげ、勢いよくえさを食べる大量のカンパチに驚いていた。

ウ 子供たちは、遊覧する漁船の中で漁協関係者や漁師の皆さんから、鹿児島湾の最深や鹿屋市漁協に所属するカンパチの養殖いけすの数など、海に関する知識を得ることができた。

エ カンパチのえさの原料となるカタクチイワシなどが保存されている、-25℃の冷凍庫の中も見学することができた。30℃を超える戸外から気温差50℃以上の冷凍室に入った子供たちは、予想以上の寒さに歓声または悲鳴を上げていた。濡れたタオルが瞬時に凍る現象にも驚きの声を上げていた。

オ 昼食に向けて、実際に自分で1尾のアジを三枚に下ろし、刺身に仕立てていった。子供たちは、漁協が準備くださった御飯と味噌汁、カンパチの刺身と一緒に自分で調理したあじの刺身にも舌鼓を打っていた。

(4) 振り返り際には、この2日間で楽しかったことや嬉しかったことなどを思い出として、全員が発表した。

## 10 成果

児童養護施設の指導者と事前打合せ等を入念に行い、本事業の目的と内容について共通理解を図ったことから、子供たちの実態にあった活動を実施することで、子供たちに驚きや感動を与えることができた。

子供から、「命の危ないところでしっかりと学んで、これからいろんなことがあるからそれを活用していきたいです。」「最後のキャンプでしたが、本当に普段体験できないことができて楽しかったと思います。また機会があれば、教育事業を取り入れてほしいです。」といった感想が寄せられた。

施設指導者から、「(子供たち自身が)自分のことは自分でできるという新たな発見ができ、今後の生活に反映させようと思いました。」といった感想が寄せられた。

今回、鹿屋市の水産業に関わる体験活動を実施できたことから、キャリア教育といった面からも参加した子供たちの自立の一步につながっていくものと感じた。

